準化によるもの）を個人検査で行い、両者間の$\left(\frac{D.A}{C.A}\times100\right)$を求め、②ついで諸種の体力検査（大崎さちえ氏標準化になるもの）を行うと同時に、③牛島義友氏翻案による社会性能力検査用紙を配布せしめ、保育者、父兄両方の観察結果に基づく$S.Q\left(\frac{S.A}{C.A}\times100\right)$を算出した。

「結果の考察」

まず発達検査の結果は〔Fig. I〕に示す通りであって、（図表、その他は大会発表要旨に記載されてあるので略す）これらの分布曲線は〔Fig. I ⓐ〕に認められる通り、D.Q.100 を平均値として段階区分を設けており、I年保育における頻数曲線からは、D. Q. 100〜115 にかけて約二〇％のプラトを有しているにかかわらず、II年保育のそれは、D.Q.100 をトップにその巾は狭く急激に下降している。しかも、D.Q. 100〜110 の間で全体の七〇％が含まれているのに反して、I年保育の平均よりの脱逸は、II年保育の巾よりも広い。次にこれらの下位テスト間に示される通過率を求めたものが〔Fig II〕であり、これらの通過率の示すところによれば、①両者共に殆どの項目に八〇％以上の通過率をみている点は、問題作製上の操作的な面があるとしても、より発達的な問題が予想されるのであるが、内容的なものとしては、②II年保育がI年保育に比較して、いわゆる動作性検査（たとえば、空間関係把握の下位検査であるブロック・デザイン、記憶問題におけるノックス・キューヴなど）においては、やや優位で、③逆に言語的なもの（絵の敍述・短文復唱など）においてはI年保育が上廻っているようである。

第三に、体力検査の結果を概観すると、〔Fig. III ⓐ〕より示された分布曲線〔Fig. III〕に認められる通り、疾走・立巾跳においてはややII年保育が優れているようであるが、荷重疾走・懸垂・片脚連続跳においては殆ど有意な差は認められない。

第四に〔Fig. V〕に示されるS.Q.の分布からは、ややII年保育の方がI年保育よりも上廻るようである。したがって、従来からいわれる通り、社会性の発達といわれるものが、その一要因として保育年限の長短との関連性でとらえられている点を、裏書きするものではなかろうか。

三年保育児に見られる傾向

附題　知能テストに見られる早生れ児と遅生れ児の差異について

神田寺幼稚園　中村徳子
福永かをり

一　まえがき

当園では創立以来七年間、地域の特長を考慮して三年保育を行ってきたが、保育が子どもたちに与える影響を科学的に把握し、また子供たちの状態を客観的にとらえなければならないことを痛感している。そこで三年保育児に見られる傾向を、毎年継続的にしかも手近かな問題をとらえて検討している。ここに述べるのもその一端である。

今回は遅生れ児二十七名、早生れ児十七名を対象とし、三年保育の三才の春施行した乳幼児精神発達検査を、五才の時同一児童にふたたび施行し、その間における両者の差の変化をテストの項目別に比較し、さらに日常保育の面とあわせて検討してみたのである。

二　知能テストに見られる差異

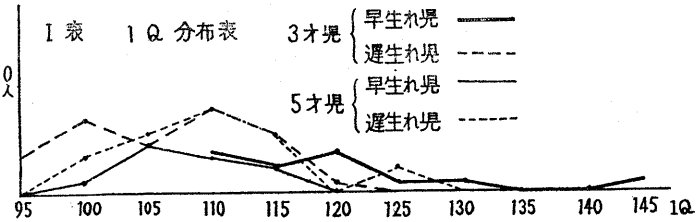
IQの分布を見ると三才の早生れ児は遅生れ児よりIQが高くなってる。それが五才になると遅生れ児の方がIQが高くなって来ているので実際面でどのような状態を示しているかテスト内容から調べて見た。

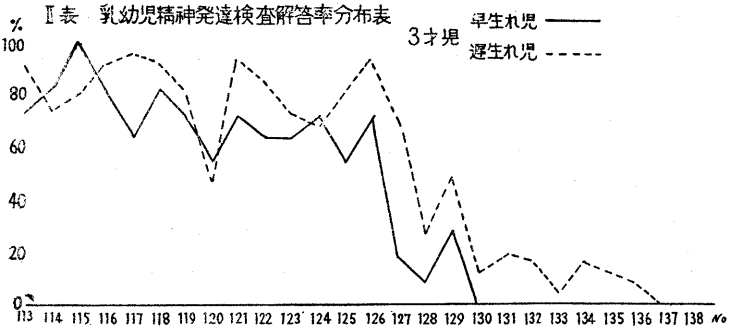
三才児の両者の差を見ると、二、三の問題を除く他はすべて遅生れ児に高率が見られ中でも二〇～四〇％の差の見られたのは、一一七、一二一、一二七番の問題である。また早生れ児に高率のみられたのは一一三番の問題のみで、両者の六か月の月令の開きが精神発達の上に大きく影響していることが明らかに示された。

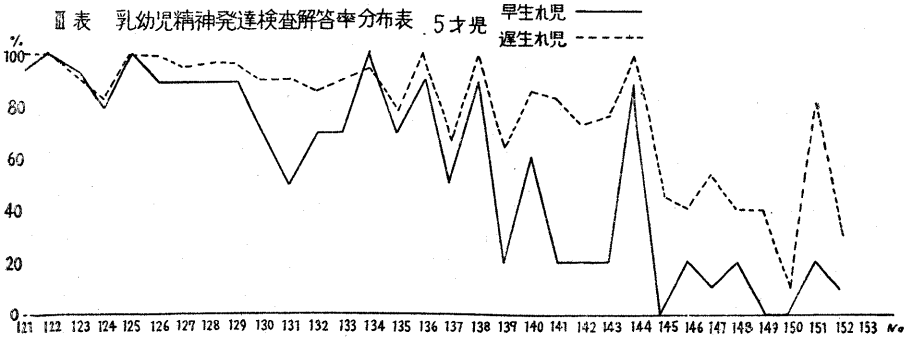
五才児では一三一、一三二、一三九、一四一番の問題に、二〇～四〇％の開きが見られ、年令が増すに従い早生れ児との差はますます大きくなった。

この差をさらに深く知るためテスト内容を項目別に検討してみた。三才児、五才児共に大きな開きのあるのは精神的生産の問題である。

三才児の場合は、早生れ児の解答率は低く五才児では一四一、一四二、一四三番のように時間で合、不合をきめるものに両者の差が多く見られた。これは早生れ児は推理力に欠け、問題を理解

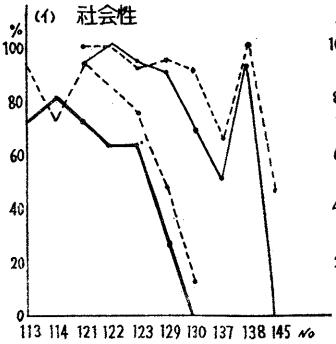


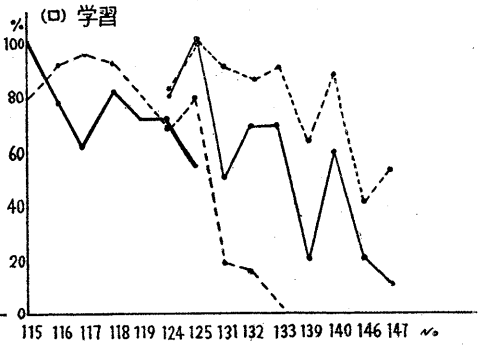


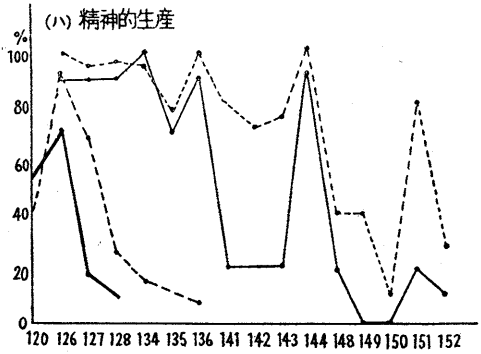


IV表　テスト内容を項目別に比較

3才児 早生れ児 ―― 遅生れ児 - - - -　　5才児 早生れ児 ―― 遅生れ児 - - - -







するのに時間がかかったり、動作が遅かったことが大きく原因されていた。

社会性と学習についてみると、三才の早生れ児は一一七、一二一、一二二番に差がみられた。これは早生れ児は自己中心性が強く、規則の理解がないことや、手の運動が充分発達していないためきれいな円が書けないことが原因となっていた。五才児で一番差のあったのは一三一、一三九番で実験者が作った形を把握し、再び構成する力が早生れ児におとっていた。

以上のように両者の差異が精神的生産と学習の問題に多く、また三才の時より五才になった方がさらに多く示されていることは注目せねばならない問題である。

三　日常保育に見られる差異

当園で使用している生活の記録にもとづいて、知的、情緒的、社会的生活から三才児、五才児共に共通して評価できるもののみを取り上げ検討してみた。

知的生活では「集中力がある」の項で三才児、五才児とも早生れ児の劣っていることが目立った。これは早生れ児は遅生れ児に比べて体力的に疲労し易いため、持続時間が少なくしたがって集中力もないと評価されるのだろう。

情緒の面では泣く、怒るなどは両者の差が殆んどなく、「わがままである」が三才児、五才児共遅生れ児の方に低い評価がされている。しかし、その個々の性格が大きく影響し、とくに早生れ児、遅生れ児としての差は生じないのではないかと思われる。

また社会的生活では三年間の集団生活の間にしだいにその

乳幼児精神発達検査問題

番号	問題項目	番号	問題項目
3才113	カード(百枚)を一回の命令で分類	133	立体模倣検査　4問
114	常識問題 2/3	134	絵合せ　1/7
115	四つの隠された物の中三つを見出す	135	迷図　男2分　女3分
116	二語復唱 2/3	136	色球並べ　1/7
117	円を模倣してかく	6才137	色の名を云う
118	積木をまねる 1/2	138	了解問題
119	位置関係を理解する	139	積木をまねて作る 4/6
120	椅子を使って箪笥から物をとる	140	立方体模倣　5問
4才121	遊戯の規則を守る	141	忍耐問題　3分以内
122	共同遊戯に於ける競争心	142	絵合せ　3/5
123	三つの命令	143	迷図　男1分，女1分50秒
124	115と同じ	144	色球並べ　3/7
125	数の復唱 1/3	7才145	記憶によって差異をあげる
126	鉤から輪を外してとる	146	積木をまねて作る　5/6
127	操人形を組合せる	147	立方体模倣　7問
128	十三の積木を数える	148	忍耐問題　2分以内
5才129	用途定義 3/5	149	絵合せ　5/6
130	要求されて縁飾りを正しくかく	150	迷図　男35″　女50″
131	積木をまねて作る 3/6	151	色球並べ　5/7
132	図形の模写	152	推理問題

差はみられなくなってきている。

四　結　語

以上の事柄を通観すると、知能の面ではテストそのものにも多少問題はあるが、両者間に相当差のみられた事実は見逃せぬことである。また日常保育においても遊びや生活習慣の面でだんだん差はなくなるが、疲労度、集中力、理解力などの面では五才児になってもやはりある程度の差が見られた。また二年保育児と三年保育児における早生れ児を比較してみると、二年保育児に比べて三年保育児はそれぞれが個性を出して成長しているということができる。

これは、幼児が集団生活を行うことによって、それぞれが自分の能力を充分に発揮し、集団の一員として生活するようになり、保育期間の長い程このような生活態度が身についたものになってくるものと考えられる。

しかし、幼児期における生活年令の差は成長が激しいだけに年令

項目		3才児						5才児					
		上		中		下		上		中		下	
		早生れ	遅生れ	早生れ	遅生れ	早生れ	遅生れ	早生れ	遅生れ	早生れ	遅生れ	早生れ	遅生れ
知的生活	遊びや仕事に創意がある			91%	17.	9.1	29.		5.6	100.	94.4		
	集中力がある			73	86.	27.	14.			50.	66.7	50.	33.3
	気持を卒直に表現する		14.	100	86.			20.	11.1	70.	72.2	10.	16.7
	話が理解出来る			100	100.				16.7	90.	72.2	10.	11.1
情緒的生活	泣く			90.9	100.	9.1				100.	100.		
	怒る			100.	100.					100.	100.		
	我儘			81.8	71.4	18.2	28.4			90.	72.2	10.	27.7
社会的生活	挨拶が出来る	18.2	14.	81.8	87.5					100.	94.4		5.6
	後片付けができる	9.1		90.9	87.5		14.		16.7	100.	66.7		16.7
	順番を守る	9.1		81.8	87.5	9.1	14.			100.	88.9		11.1
	人の前で発表出来る	9.1	28.5	63.6	57.1	18.2	14.	20.	44.4	70.	50.	10.	5.6
	友達と仲良く遊ぶ			100.	100.					80.	77.8	20.	22.2
	人に迷惑をかけない			100.	100.					70.	66.7	30.	33.3
	自分の持物の始末をする	9.1	14.	81.8	57.1	9.1	28.5			100.	100		
	友達のいうなりにならない			100.	87.5		14.			60.	88.9	40.	11.1
	仕事をやり遂げようとする			100.	100.				11.1	100.	88.9		

の低い程、知能の面に多く現れ、このような差を持つ子どもたちと同じに保育することが無理であることはいうまでもない。したがって、とくに三年保育の場合、年令別に級編成するとか、その他保育の面に充分考慮せねばならないことが多くあると思う。

幼児の音感教育

——集団指導を中心として——

香川大学　佃　範　夫
高松幼稚園　井上範子

Ⅰ　音感教育をとりあげたわけ

幼児期の教育においてなさねばならないもの、否、しておかねばならないものは何であるかを考えてみる時、人はその一つに音楽教育をあげている。しかし、その音楽教育は従来個人指導の形で特殊的に行なわれてきたようである。がしかし私たちがここで音感教育をとりあげたのは、音楽の専門家を養成するというのでなく、むしろ大勢の者が音楽を正しく理解し音楽の楽しさを味えるような音楽の一般化をねらいとしてきた。

幼児の音感は満三歳半頃が最も敏感であるといわれているが、果してこのようなことがいえるだろうか。また幼稚園教育の中において集団指導による音感教育はできないものであろうか。この問題解決のために私たちは主として集団指導による音感教育の問題をとりあげてみた。

Ⅱ　音感教育の実際について

今回は昭和三十一年六月より昭和三十二年三月までの結果についての報告である。

一年保育、二年保育、三年保育と各年令別級編成によるが、方法も年令差をつけず、各組共、全く同一の方法で行った。そして少くとも毎日約五分間音をきかせるというようにし、週に一度は香川大学の音楽の藤原氏の御指導を仰いだ。

音感教育といっても従来のような音感のみを機械的に訓練するのでなく、和音、単音の聴音判別の他に歌唱、リズム、読譜、簡単な理論、など綜合的な音楽教育という立場で実施していくよう心がけた。

これらの取扱いについては、子どもの興味ということを考え、幼児が喜びの内に、楽しく音楽を学びとっていけるように「いろおんぷ」を使ってみた。その結果、クレヨンで絵をかきながらドレミで歌をうたい、花や洋服さらにはお弁当のパンが歌になったり、また園外保育の時などふみ切の信号をみていろおんぷのうたを歌いだすというように、生活の中で音楽を身近かにとらえ楽しむという態度が見受けられるようになってきた。さらにピアノのKeyに色カードを立ててやると、自分でさぐりながら弾き歌いを楽しむといった状態で、歌う楽しみの他に自分で弾ける喜びを味えるようになり、今まで内気であった子どもも自信を得て元気になったという例も少なくない。しかし、何しろ始めての試みなので、どのように取扱うのが最も理想的なのかいろいろな方法を試みた結果、和音をきかせる場合では、あらかじめ各和音の動作をきめておき、音をきくとすぐにその動作をするというのが子どもたちには最も喜ばれた。単音の場合も、これは何ですかというのでなく、お話の中でメロディーと